

“情報とは何か？”

土木工学科 官 野 一 彦

情報として莫然と使われている概念は、新聞・ラジオ・書籍雑誌・電話・テレビなどのメディアを通じて送受されるデータであります。ある特定の立場における価値観というフィルターを通されたものであるといわれています。従って多数のデータを処理して、これに高度の加工を施すとき、価値のある情報が出来て来ます。それが精神的な文化、文明として受け入れられるものとなります。しかし創造の世界に情報処理の概念を持ち込むことはまだ行なわれておりませんので話を身近なレベルにかぎって見ましょう。今日情報量が飛躍的に増大しつつあることは昭和35年から43年迄に、例えば書籍の売上げ部数が年間1億5,000万部から4億1,000万部へと2.8倍となり、郵便物が年間68億通から100億通になり、通常郵便物1人当たりが年間73通から101通に、通信回数が164回から231回にも増加したということからも知ることが出来ますが、われわれの身近にあって専門雑誌数や文献数の増大が感じられます。このような情報量の増大に対処しようとする際、まったく無関心あるいは故意に情報量の増大を無視することは恐らく世間の進歩より取り残されることになるでしょう。そこで膨大なデータの中より、

真にわれわれの必要とする情報をいかに要領よく効果的に抽出し、加工し、蓄積するかが問題となって来ます。情報量が爆発的に増大し、またその処理の方法が進歩していくということは、とりもなおさずそのような状態はコンピュータが作り出し、コンピュータによって担われるのです。例えば国鉄のみどりの窓口、郵便物の郵便番号による処理、電気・ガス等の請求書などすでにコンピュータを利用した情報処理の例は身近にいくらでも見られます。

さて土木の場合の情報処理はどうでしょうか。海岸波浪の波高周期情報が刻々と集計されても直ちにそれに対処する必要はなく、交通量情報によって道路の線形を即時変更することはありません。土木の場合は工事の計画、構造物の設計、開発システム、環境システムの設計及び構造物の維持管理にかかわるものであります。それでオンライン・リアルタイムということはそれほど要求度は多くありません。しかし膨大なデータの中から必要とする情報を抽出し、加工し蓄積することはオンライン的ではありませんが必要となっております。具体的な問題を列挙すればよいのですが紙数の都合上省略します。

友と語る — 文学のひろば —

その 3

西牧君の 『人形の家』について

2 C 小 柳 なおみ

ヒブリア第3号の(文学のひろば)で、西牧君が『人形の家』について次のような問題を提起された。

すなわち、家庭を捨てたノラの行動の是非について「人間として生きるということと、母親として生きるということとは、次元を別にして考えるべきであろうか」と疑問を投げかけたが、西牧君は暗にノラの行為については批判的な態度をみせていた。

この問題について、私なりの考えを披露してみたいと思ってペンをとった。

私はこの物語で扱われている「真実の愛」というものに目を向けた。この物語を読んだ人はきっとノラの夫メルヘルが、ノラに対し「真実の愛」を与えなかったと考えるだろう。そしてノラが一番求めていたものは「真実の愛」だったのだと言うにちがいない。

しかし、この世に「真の愛とはこういうものだ」と定義づけられる人がいるだろうか。自分の愛に疑問を持つ人は少なくない。人は「自分の愛は真実なのか」と思い悩むだろう。だが、「真実の愛」を決定できる人は存在しないにちがいない。

それならば、ノラは単なる偶像を追いかけていたのだろうか。空虚な妄想に惑わされて、すべてを捨てたのだろうか。

ノラは、夫を、そして子どもを捨てるという時に、苦悩というものを知らなかった。彼女の心の中にあつた何物かが、大きな壁にぶつかった時、爆発した。そして彼女は初めて、人間である自分に気付いたのだ。

人が行動を起こす時、そのすべては愛と良心とによって止められ、すべての人は愛と良心の前にひざまづき、苦しみ、悩み、行動するか、否かを決定するものだと思える。

ノラは、愛がなかったが故に、この苦悩を知らずにすんだのだと思う。メルヘルは、彼女への愛と称するものを、利己主義の武器につかっている。ノラを押さえてまでも、自分のために彼女をつかんでおこうとしている。愛を盾にし、自分の利己主義を貫こうとしている。たとえメルヘルの愛が真実のものであったとしても、この時点において、彼の愛は真実ではなくなっていると思う。尊敬も信頼もそして愛も失われた結婚生活を、どうしてノラが続けなければならないのだろうか。彼女が飛び出していくのは当然ではないか。

彼女が一人の母親であったことが、とがめられるべきことなのだろうか。私は彼女の母としての愛を信じたい。ともすると、子ども達を第二の人形子にしそうな彼女は、まちがった母としての愛を、たち切ったのだ。感情のない、感情を認められることのない人形にすることを、彼女の愛は許さなかったのだ。

私は、彼女の行動は、人間として生きることと、母として生きることの両方を満たすものであったと思う。そして、彼女の行動に、心から賛同の手を差し延べたい。

彼女は脱出した。自分の勇気と力で。だが、彼女の未来はどうなのだろう。一人苦難に満ちた道を勇しく歩くだろうか。それとも、真実の愛（彼女の求めている愛）を与えてくれる人とめぐり会い、幸せな日々を送るだろうか。私は、彼女を信じたい。彼女だったら、人間である彼女だったら、きっと自分の勇気と力で、幸せを見つけたさだろうと。

『獵人日記』

— ツルゲーネフ —

3 M 大 沼 武

『獵人日記』におけるすぐれた自然描写と、その歴史的役割については、かねてから、しばしば耳にしていた。すなわち、広大な自然の中に、農奴制のもとで、みじめに生きるロシア帝政期の農民の姿が誠実に描かれている、ということである。

確かに、作者の冷静な観察眼には、感きわまるものがあつた。「マリーナの泉」、「領地管理人」、に代表される、あまりにもあわれな農奴たちの姿は、今でも目の奥に焼きついて離れない。それらの淡々とした記述には、正直のところ、いらいらさせられたが、それだけに印象が激化したことは否めないのである。

ところが悲しいかな！一級品ともいふべき、ツルゲーネフの自然描写ではあつたが、とうとう最後まで、なむじむじむできなかった。思えば無理からぬことである。こんなちっぽけな島国に住む私に、どうしてロシアの、あのケタ違いのスケールをもつ大自然が理解できよう。「みわたすかぎりの麦畑……」を、無理に想像しようとしても必ずや、ぼつてりとした山々が空想を無慈悲にさえぎってしまうことだろう。

さて、この25編から成る傑作は、実にさまざまな「人間」を私に紹介してくれた。飢えに苦しむひもじい人間、裕福だが孤独な人間、恋に疲れ果てた人間……、こうした種々な境遇におかれた人間がさらに、傲慢・内気・高潔・勇敢……など、誰もが避け得ない「人間性」を、まったく偶然的にしよひこみ、実に多彩な人間模様を描き出したのである。いったい、これらのうちの誰が幸福で誰が不幸だったのか？そして、誰が正当で誰が不当だったのだろうか？作者に彼ら一人一人を引き合わせて貰った。その折々に、じっくりと観察したものだが、まずおよそ疑問は晴れずじまいであった。「生きたご遺体」の中で、若くして見るにたえない病身と、死ぬまで続く病床生活を強いられたルケリヤ（しかも彼女はあんなにも明朗で美しい少女だった）は言った。誰が他人の心の中にはいれますかしら？お信じになれないでしょうが、私はほんとにつらくなんかないんですよ。私は幸福なのです……と。彼女のこの言葉は、私にとって今だに謎である。

ところで、作中の「わたし」とは、いったいどんな男だろう？と思いたち、すぐさまつきとめにかかったが、彼は持ち前の慎重な描写をもって、容易に腹を割ってはくれなかった。時折、美しい自然を前に恍惚として、わずかに調子がうわずるくらしいものである。結局のところ、彼の性格なるものはほとんど得られな

かった。ただその当時、彼が地主で、年齢も30歳前後ということはやさく推測できた。さて彼が地主であるからには、当然農奴を所有し、またそれらに対して（ある程度の）迫害も禁じ得なかつたことだろう。にもかかわらず、彼の手記全体には農奴制に対するヒューマニスティックな反発すら感じ取れる。この矛盾—地主という実際の立場と、道徳的、人間的な立場との板ばさみになり、彼はひどく悩んだのであろう。そしてこの苦悩が、彼に農奴制下の人々のありのままを、誠実にスケッチするよう促したのかもしれない。作品を読み進めながら—甚だ無責任ではあるが—私なりに農奴たちに同情したし、農奴制を呪いもした。そしてはからずも自分が今の世に生まれ落ちたことを、この上もない幸福と感ずるのである。

樋口一葉作

『にぎりえ』を読んで

3 C 梅津千恵子

とても複雑な気持ちで読んだ。お力の行為、心情、言葉全てが私には驚きだった。

明治時代の汚れた銘酒屋に展開される男女関係を背景に、自らを傷つけて生きなければならなかつたお力に、私も女性本能のような悲しさと哀れみを覚えた。貧しく生れた故に純粋な人生観を押しえつけ、裏に潜む社会にはいつて行つた一女性、お力にとって“生きる”とは、どんな意味を持っていたのだろうか。

結城との対話の中で、お力は胸にくすぶっていた自己批判、自己嫌悪を押しえきれなくなつたに違いない。穢れた生活に身を投じ、自分を忘れようと強いていたことの寂寥から一人悩む姿は、どん底に生きる人間としての自覚の悲しさに溢れている。子供の頃の苦勞、祖父、父の悲しい人生、それら全てがお力をやりきれなく寂しくしたのだろう。「私が考えたところでどうにもならない。こんなに苦しむのはよそう。苦しんだところでどうにもならない。私は人並ではないのだから人並の事を考えて苦勞する事が間違っているのだ」、そう決めつけ低俗界の人間に自分をおくことで解決しようとした彼女。しかし、彼女自身その無理を知つてしまつている。だから悩んだ末に、自分を嘲らなければ

生きてゆけない今の人生に涙を流したのである。”人並。でないお力は、”人並。を切望していた。”人並。に母になりたい欲望も強かつた。お力にとって”生きる”ということとは、”人並。に暮らしたい願望だつたのではないだろうか。しかし、彼女が”人並。になるには現実はいかに冷徹だつたのだろうか。

短く果てたお力に、私は不思議な驚きの目を向けることで精一杯だつた。

哀れなお力の陰に、私の心をひいたもう一人の女性がいる。源七の妻お初。彼女は、お力に心寄せた夫がもとのようになることを願ひ、黙々と生活していく。彼女には子供があつた。私が、このお初に何か心安らぐものを感じたのは、彼女の夫に対する態度が私の理想と重複しているせいだろうか。しかし彼女も又、子供のために、”生きる。ために自分を犠牲にしてしまつたのだ。その意味で、私は俗に言われる昔の日本の女の生き方らしきものをこのお初に見い出さずにはいられなかつた。お力から見れば”人並。であつたお初も、悲劇の主人公に漏れることは出来なかつたのである。

女が”生きる。ということは何なのだろうか。現実の社会に自己を見失ふことなく”生きる。ということとは—。お力やお初の時代に”人並。に生きることは、どんな意味を持っていたのだろうか。

私の彼女達に対する哀れみは、私も又女として彼女達と同じ生き方の可能性を持つことへの反抗であり、悲しさは、私自身の女であることの悲しみであるような気がする。

一葉がこの著に何を託そうとしたのか私にはわからない。しかし、当時の冷徹無残な社会状況と、その中で生きることを強いられた女の悲しさだつたような気もするのである。一葉という女性の社会に対する訴えだつたのではないだろうか。

一葉自身25歳の若さで生涯を終え、一作品『にぎりえ』を残していつた今、明治という時代の流れと社会状況に隠された女の感情、社会への訴えが、昭和のこの近代化された時代に生きる私にどれだけ理解し得るか不安が残る。私が感じたのは、”女。としての事だけだつたのかもしれない。が、『にぎりえ』を読んだことで今まで感じたことのなかつた”女。について考えさせられたのだとしたら、それだけで充分意味があつたと思うのである。

新着図書目録

図書館にのみ所在する図書を分類別
受入順に記載

総記

朝日新聞縮刷版	47-3	朝日新聞社	大日本百科事典(ジャポニカ)21	
同	47-4	同	世界美術名宝事典	小学館
同	47-5	同	時事百科(ジャポニカ)	
同	47-6	同	大日本百科事典編	同
同	47-7	同	出版ニュース社	
同	47-8	同	出版年鑑 1972	出版ニュース社
大日本百科事典(ジャポニカ)19			日本の名著	
索引小百科		小学館	4 通信	中央公論社

委軍武夫 同 27 歴史の思想	同	高坂好 同 155 赤松円心・真祐	同	ジョン・W・ドレイパー 宗教と科学の闘争史	社会思想社
香木順三 同 28 辻哲郎	同	佐伯有清 同 156 伴善男	同	A・オールヒ ブルーボックス ブランクトンの世界	講談社
益田博実 同 29 柳田国男	同	所功 同 157 三巻清行	同	W・W・ソーヤー ブルーボックス 代数の再発見 I・II	講談社
同 同 30 民俗の思想	同	片桐一男 同 158 杉田玄白	同	イアソ・ソラントン ブルーボックス ゲーウィンの島	同
城川文三 同 31 超国家主義	同	大林日出雄 同 159 御木本幸吉	同	ファン・ヒール ブルーボックス 光とは何か	同
久野収 同 33 三木清	同	内田守 同 160 光田健輔	同	都筑京司 ブルーボックス 新・パズル物理入門	講談社
日高六郎 同 34 近代主義	同	城根希 同 161 平賀源内	同	B・コモナー ブルーボックス ながか環境の危機を招いたか	講談社
林健太郎 同 35 新保守主義	同	三吉明 同 162 山室軍平	同	笹部貞市郎 問題解決 代数学辞典上第二版	聖文社
高橋長孝 ユング著作集		鈴木映一 同 163 橋守部	同	重弘 精神医学の思想 筑摩総合大学 筑摩書房	筑摩書房
1 人間のタイプ	日本教文社	宮沢賢治 同 同 1-12	筑摩書房	井口洋夫 化学入門 筑摩総合大学	同
同 2 現代人のたましい	同	草野心平 同 同 同	筑摩書房	高木純一 システム科学	同
江野専次郎 同 3 こころの構造	同	ミユコ 同 同 同	現代思潮社	化石研究会 化石の研究法	共立出版
浜川祥枝 同 4 人間心理と宗教	同	山鹿誠次 同 同 同	古今書院	電気学会通信教育会 情報処理のための数学	電気学会
西九四方 同 5 人間心理と教育	同	都市調査法	同	大村平 情報のはなし	日科技進出版会
プラトン全集V	全国書房	歴史と体験	同	レオン・プリラン 科学と情報理論	みすず書房
日本基督教協議会 キリスト教大事典	教文館	日本庶民生活史料集成 第18・20巻	同	R・W・サウスワース他 電子計算機のための数学 I・II	共立出版
神道辞典	増書店	太田亮 姓氏家系大辞典 第1~3巻	同	赤坂隆 数値計算	コロナ社
		堺別シリーズ7 福島県	同	小野博宣 コンピュータ図学	同
		観光と旅 郷土資料事典	人文社	黒須康之介 微分学の演習	倉北出版
		岩波講座	同	平野幸太郎 積分学の演習	同
		日本歴史23・別巻2	岩波書店	高野一夫 微分方程式の演習	同

歴 史

多賀宗平 人物叢書126 柴西	吉川弘文館
伊持章 同 127 榎亭禮存	同
平野親太郎 同 128 大并憲太郎	同
柳田泉 同 129 播磨権盛	同
安田元久 同 130 源義家	同
今井源衛 同 131 義武部	同
杉本尚雄 同 132 菊地氏三代	同
渡辺保 同 133 源義経	同
帆足国南次 同 134 帆足万里	同
高橋昌郎 同 135 中村致守	同
岩沢忠彦 同 136 前田利家	同
太田喜康 同 137 堀保己	同
川端太平 同 138 松平春嶽	同
田口正治 同 139 三浦梅園	同
森島 同 140 小堀遠州	同
圭室謙成 同 141 横井小堀	同
吉田武三 同 142 松浦武四郎	同
山本四郎 同 143 小石元俊	同
久保田正文 同 144 正岡子規	同
笠井清 同 145 南方朔橋	同
安藤更生 同 146 鑑真	同
三吉明 同 147 有馬四郎助	同
川口久雄 同 148 大江匡房	同
長江正一 同 149 三好良康	同
鮎沢寿 同 150 源頼光	同
小長久子 同 151 滝藤太郎	同
横山昭男 同 152 上杉謙山	同
岸俊男 同 153 藤原中麻呂	同
北島正元 同 154 水野忠邦	同

社会 科学

六法全書	有斐閣
昭和47年版	同
傳田国男 柳田国男集 第2~31巻	筑摩書房
同 同 別巻1~5	同
朝日新聞社 日本と中国 中国は大きい	朝日新聞社
同 同 5 暮らしの改革	同
同 同 6 科学と労働を結ぶ	同
同 同 7 短編なき軍隊	同
鮎戸弘 コミュニケーション 筑摩総合大学	筑摩書房
竹内万郎 現代革命の思想6	同
高度資本主義国の革命	同
シャルル・フォーリエ 四運の理論上下	現代思潮社
リーマン 孤独な群衆	みすず書房
ルース・ベネディクス 剣と刀・定訳	社会思想社
E・カニンガム マルクス主義の倫理学的基礎	岩波書店
A・ラトレイユ 国家と宗教	同
恒島恭 法と道徳	同
A・P・アントレーウ 自然法	同
吉田松隆全集 第4・7巻	大和書房
ジョン・W・ドレイパー 宗教と科学の闘争史	社会思想社
A・オールヒ ブルーボックス ブランクトンの世界	講談社
W・W・ソーヤー ブルーボックス 代数の再発見 I・II	講談社
イアソ・ソラントン ブルーボックス ゲーウィンの島	同
ファン・ヒール ブルーボックス 光とは何か	同
都筑京司 ブルーボックス 新・パズル物理入門	講談社
B・コモナー ブルーボックス ながか環境の危機を招いたか	講談社
笹部貞市郎 問題解決 代数学辞典上第二版	聖文社
重弘 精神医学の思想 筑摩総合大学 筑摩書房	筑摩書房
井口洋夫 化学入門 筑摩総合大学	同
高木純一 システム科学	同
化石研究会 化石の研究法	共立出版
電気学会通信教育会 情報処理のための数学	電気学会
大村平 情報のはなし	日科技進出版会
レオン・プリラン 科学と情報理論	みすず書房
R・W・サウスワース他 電子計算機のための数学 I・II	共立出版
赤坂隆 数値計算	コロナ社
小野博宣 コンピュータ図学	同
黒須康之介 微分学の演習	倉北出版
平野幸太郎 積分学の演習	同
高野一夫 微分方程式の演習	同
安達忠次 三角法、フーリエ解析の演習	同
渡部貞勝 解析幾何学の演習	倉北出版
渡部隆一 ベクトル解析学の演習	同
小高司郎 画法幾何学の演習	同
村勢一郎 代数学の演習	同
野中敏雄 確率・統計の演習	同
柳村信雄 面数論の演習	同
正田建次郎 数学ライブラリー 多元数論入門	同
梶原隼二 同 2 複素関数論	同
久野健太郎 同 4 接続の幾何学	同
牧野都治 同 5 OR入門	同
小野寺力男 同 6 グラフ理論の基礎	同

自然 科学

文 学

機械加工マニュアル委員会 機械加工マニュアル 誠文堂新光社				6 悲劇 I 同	三神勇 7 同日 同	小津次郎	
機械工作便覧編集委員会 JISにもとづく機械工作便覧 理工学社			大江健三郎				8 悲劇 III 詩 同
伊藤編 工具事典 誠文堂新光社			個人的な体験 新潮社				折口信大全集第 5 巻 同
日本美術協会 新版キュボラハンドブック 丸善			石翠情太郎 化石の森上下 同				日本近代文学大系 9 北村透谷・徳富重花集 角川書店
河上益夫 彫処理技術シリーズ 1 彫処理の基礎(Ⅰ) 2 彫 (Ⅱ) 日刊工業			江森洋 鑽石とその時代第 1・2 部 叢 同				42 川越康成・横光利一集 同
デン・ハルトーク 応用材料力学 養賢堂			遠藤周作 沈黙 同				57 近代評論集 I 同
等々力徳重 広範機械用語辞典 機械協会			岡高健 理ける筐 同				5 文学世界文学大系 3 ブラトン 筑摩書房
バーバラ・ワード 監 かけがえない地球 日本総合出版機構			大岡昇平 レイテ戦記 別巻付 中央公論社				15 セルバンテス 同
中田孝 工学解析—技術者のための数学手法— オーム社			Natsume Soseki BOTCHAN Kodansha				33 オースティン・ブロンテ 同
八田祥三 高気圧動機 森北出版			高橋和巳 高橋和巳作品集				42 トルストイ II 同
岐実裕 工業熱力学 同			1 捨子物語 河出書房新社				62 ヘッセ 同
景山久 大気汚染と自動車排気ガス 技術書院			2 悲の器 同				65 カフカ 同
			3 憂鬱なる党派 同				現代の文学 6 大同昇平 講談社
			4 邪衆門 同				17 安岡章太郎 同
			5 我が心は石にあらざ 同				25 吉本隆明 同
			6 日本の悪霊 同				30 北杜夫・三浦哲郎 同
			7 エッセイ集 I 同				現代日本文学大系 2 福沢諭吉・三宅雪嶺・中江兆民・岡倉天心 同
			8 同 2 同				徳富蘇峰・内村鑑三 筑摩書房
			9 中国文学論集 同				58 村山知義・真船量・久保栄・三好十郎 同
			別巻 詩人の運命 同				66 河上徹太郎・吉田健一・山本健吉・江藤淳 同
			ヘッセ著作集 同				74 中島健蔵・中野好夫・河盛好蔵・藤原武夫 同
			怒愁 人文書院				79 本多秋五・平野謙・荒正人・塚谷雄高・ 小田切秀雄 同
			渾泊の人 同				81 野間宏・武田燾作 同
			青春は美し 同				87 堤田晋吉・遠藤風作・井上光男 同
			乾草の月 同				現代日本思想大系 32 反近代の思想 同
			湖畔の家 同				明治文学全集 30 樋口一葉 同
			知と愛 同				69 島崎藤村 同
			荒野の狼 同				スタンダール全集 I 赤と黒 人文書院
			若き人々へ 同				2 パルムの僧院 同
			メルヒエン 同				3 リュシアン・ルーヴェン I 同
			ジツタルタ 同				4 同 Ⅱ 同
			婚約 同				5 アルマンズ中道集 同
			内面への道 同				6 イタリア年代記ラミエル 同
			春の嵐 同				7 アンリ・ブリュラーの生涯 同
			車輪の下 同				9 イタリア絵画史 同
			庵郷 同				11 評伝集 同
			放浪 同				12 エゴチズムの回想日記 同
			孤独者の音楽 同				
			夜の慰め 同				
			青春時代 同				
			戦争と平和 同				
			夢のあと 同				
			聖者と甘いパン 同				
			テミアン 同				
河上倫明 原色日本の美術 26 近代の日本画 小学館			へっせ著作集 同				
神代雄一郎 28 近代の建築・彫刻・工芸 同			小田島雄志 シェイクスピア全集 筑摩書房				
豊田博 バレーボールのトレーニング 大修館書店			1 喜劇 I 同				
			2 喜劇 II 同				
			3 喜劇 III 同				
			4 史劇 I 同				
			5 史劇 II 同				
			高原芳彰				
			新訳漢文大系 27 礼記上 明治書院				
			藤田正 同 30 春秋左氏伝(一) 同				
			星川清孝 同 34 楚辞 同				
			猪口篤志 同 45 日本漢詩上 同				
			同 同 46 同 下 同				
			高部義信 新語情報 研究社出版				
			佐渡谷重信 時事英語要語辞典 竹村出版				
			西原忠毅 陥りやすい英語の難所 松栢社				
			三省堂編修所 ドゥーナン図解英和辞典 三省堂				
			国弘正彦 国際英語のすすめ 実日新書 127 実業之日本社				
			上本明 現代英語の用法 研究社出版				
			井上義典 英米風物資料辞典 開拓社				
			三省堂編修所 コンサイス外米語辞典 三省堂				
			Brewers Dictionary of phrase and Fable Cassell				

芸 術

語 学